

Not 後置型-ing 形の盛衰—助動詞 do の発達の隠れた側面

(1) 16-20 世紀日記・書簡資料を根拠に*

中 村 不二夫

1. 序

本論文で問題とする構造は、(1) のように、現在分詞や動名詞が後置された not によって否定される文を指す。

(1) a. 1669 S. Pepys, Diary, IX 461, but she coming not, I went to her husband's chamber

b. 1660 S. Pepys, Diary, I 226, many of my things are quite spoiled with mould, by reason of lying so long a-shipboard and my cabin being not tight.

このような not 後置型現在分詞／動名詞に関する研究は、Nakamura (1998) で論文として、さらに用例調査を推し進め、Nakamura (2000) の口頭発表で外国の学者たちの反応を確かめた。特に A. W. Warner が大変興味を示してくれた。中村 (2005) の口頭発表はその発展研究で、テキスト別に頻度を示してきたこれまでの方法とは異なり、用例の書かれた西暦に基づいて頻度表示をした。さらに、CD-ROM コーパスの調査結果を併せ示し、テキスト調査で網羅できなかった時代を補った。これにより、Nakamura (1998, 2000) の結論を補強した。本論文は、中村 (2005) の口頭発表の第 1 節から第 4 節を論文の形にしたものである。

2. 本研究の目的

現代英語の現在分詞や動名詞の not による否定は、(2a, b, c) に示されているように、not を-ing 形の直前に置くことが規則である。

(2) PE における not 後置型現在分詞への言及

a. *not* in reality stands *before* the real verbal statement, the part containing the

verbal meaning, i.e., infinitive or participle, just as other sentence adverbs stand before infinitive or participle and just as older *ne* as a sentence adverb stood before the real verb. (Curme 1931: 137)

- b. In negative nonfinite clauses, the negative particle is generally positioned before the verb or the *to* of the infinitive: (Quirk et al. 1985: 994)
- c. Secondary verbal negation differs from the others in two respects. First, it never introduces the auxiliary verb *do*. Second, it is always analytic: negative verb-forms are all primary except for the *don't* of imperatives. In all cases, then, secondary verbal negatives are formed by placing *not* as premodifier of the VP, (Huddleston and Pullum 2002: 803)

ただ、現代英語のこの語法について詳しく論じられている文法書をこれら以上に探し出すことは容易ではなかった。そこで、*not*の前置に関し、(2a)の“in reality”, (2b)の“generally”がどの程度の頻度を指しているのか、あるいは(2c)のいうように“In all cases”なのか、検証を兼ねてLOB, BROWN, FLOB, FROWNの4つの電子コーパスを現代英語の代表として試しに調査してみたところ、一見*not*が現在分詞／動名詞に後置されている構造として(3)が得られた。

- (3) a. 1961 O. Prescott, “Books of the times”, *The New York Times*, p. 33, Field Marshal Slim has abridged it for the benefit of “those who, finding not so great an attraction in accounts of military moves and counter-moves, are more interested in men and their reactions to stress, hardship and danger”. (軍事手段や対抗手段の説明にさほど引きつけられることがなく、むしろ人間や、緊張・苦難・危険に対する人間の反応のほうに興味を抱く人々のために、スリム陸軍元帥はそれ (= 軍の専門的事項がぎっしり詰まった長大な本) を簡約化した。) (BROWN C03)

- b. 1961 R. Sherwood, “The United Kingdom and the European Common Market”, *Peace News*, 6-7, Coal and steel production being not directly military

- matters, and France being moreover the biggest of the six contracting parties, acceptance of a supra-national authority did not in this case offend French susceptibilities. (石炭や鉄鋼の生産は即軍事問題とはならないし、さらに、フランスは6つの連盟国の中で最大の国なので、超国家的権力を受け入れてもこの場合フランス人たちの感情を逆なですることはなかった。) (LOB F15)
- c. 1961 G. Green, *The Heartless Light*, 166-170, She answered him precisely, missing not a beat in her scrutiny of the financial reports. (彼女は彼に正確に答弁をした。自ら行った経済報告書の綿密調査に驚きや衝撃のかけらも見せずに。) (BROWN K12)
- d. 1991 D. Jacobson, *Hidden in the Heart*, 120-125, It was indistinguishable, this pride, from the conviction of being utterly ignorant of what was going to happen to me and caring not at all what that might turn out to be.. (区別のつかないものだった。このような思いあがり、我が身に何が起こりそうかまったくわからないしそれがどうなろうとちっとも気にしないという信念とを区別するのは。) (FLOB K14)
- e. 1991 P. Quinn, "Second Hand WOES", *Making Music*, no. 61, 18-19, The minute you buy something, it becomes 'used', and its value drops dramatically - even if you never take it out of its box - it has the stigma of being 'not new'. (物は、買った途端に中古となり、価値が急落する。たとえ箱から取り出さなくても。「新品でない」という烙印が押される。) (FLOB E12-1)
- f. 1961 V. Gaul, "Ayrshire's Little Castle", *Scottish Field*, 55-56, Some of the painting, which took four years to complete, was ruined by the lime of the thick walls having not yet dried out, and Scott repainted part in zinc. (その絵は完成に4年もかかったのだが、絵の一部が、厚い壁の酸化カルシウムが乾ききっていなかったために台無しになった。そのため、スコットが一部を亜鉛で塗り替えた。) (LOB F29A)

これらのうち、(3a, b, e) の not は、現在分詞／動名詞を否定しているのではなく直後の語句を局所否定している例であると考えられるため、not 後置型現在分詞／動名詞の用例は最終的に (3c, d, f) の3例となる。¹⁾ (3c) の-ing 形は単純現在分詞である。(3d) のそれは、前置詞 of に支配された単純動名詞ではあるが、距離が離れているため名詞性は弱いと考えられる。(3f) の-ing 形は前置詞 by に支配された複合動名詞であるが、名詞性は強くないと考えられる。この結果、LOB, BROWN, FLOB, FROWN の各コーパスにおける not 後置型と前置型の生起数は表1のようになる。

表1 ing形に対する notの相対的位置の相剋—LOB, BROWN, FLOB, FROWN コーパス

a. 単純現在分詞／動名詞の場合

	V-ing	
	分詞	動名詞
	前置：後置	前置：後置
LOB (1961)	63 : 0	31 : 0
BROWN (1961)	59 : 1	38 : 0
FLOB (1991,1992)	51 : 0	40 : 1
FROWN (1991,1992)	24 : 0	38 : 0
平均後置率	0.5%	0.7%

b. 受動／完了をあらわす複合現在分詞／動名詞 *being* PP の場合

	<i>being</i> PP	
	分詞	動名詞
	前置：後置	前置：後置
LOB (1961)	1 : 0	2 : 0
BROWN (1961)	1 : 0	0 : 0
FLOB (1991,1992)	0 : 0	1 : 0
FROWN (1991,1992)	0 : 0	1 : 0
平均後置率	-	0%

c. 完了をあらわす複合現在分詞／動名詞 *having* PP の場合

	<i>having</i> PP	
	分詞	動名詞
	前置：後置	前置：後置
LOB (1961)	3 : 0	4 : 1
BROWN (1961)	4 : 0	3 : 0
FLOB (1991,1992)	2 : 0	2 : 0
FROWN (1991,1992)	0 : 0	2 : 0
平均後置率	0%	8.3%

表 1a により、単純現在分詞／動名詞のいずれにおいても後置型は 1% にも満たないことが、表 1b, c からは、複合現在分詞／動名詞（この用語は、伝統的には別の言語現象を指すが、これに代わる適切な日本語が思いつかないため、be PP, have PP の現在分詞／動名詞形をこのように呼ぶことにする。）においても後置型は極めて珍しい構造であることがわかるが、完全消滅しているわけではない。したがって、現在分詞／動名詞と not の相対的位置に関する (2) の学説のうち、Huddleston & Pullum (2002) は、彼ら自身の調査資料には忠実な帰結だったのであろうが、現代アメリカ英語の BROWN コーパスのみならず現代イギリス英語の LOB, FLOB にも残存している以上、極論といわざるを得ないこと、Quirk et al. (1985) の言説が穏当であることが判明する。²⁾

では、現代英語におけるこの傾向は英語史にも当てはまるのであろうか。この問題に迫ってみることが本論文の目的である。

3. 先行研究

現代英語の研究と同じく英語史研究においても、-ing と not の相対的位置に関する研究は極めて少ない。Jespersen や Visser 等の英語史の基本書には見当らず、筆者の知る限りでは、辛うじて南雲堂文献翻刻シリーズ 21 巻のうちのほんの 2 箇所と、Söderlind (1958), Wada (1975) の研究に指摘があるだけである。

(4) 英語史における not 後置構造への言及

a. The negatiu'not, iʒ commonly sett after the v'erb or hiʒ f'yn of tenc', and be'fór a partic'ipl. (Bullokar 1586: 141)

b. The negative particles are not well situated between the active participles of auxiliary verbs, and the passive participles of other verbs. *Which* being not admitted into general use, does not please the ear so well as *which* not being admitted. Having not known, or not considered; i.e. not having known.

(Priestley 1769: 124-125)

c. 1683 J. Dryden, *The Vindication of the Duke of Guise*, 213, debates coming

not by any Act to any issue

(Söderlind 1958: 158 & n. 1)

- d. 1598[?]/1599[?]/1600[?] T. Deloney, *Thomas of Reading*, 264, 7-9, in Mann, F. O., ed. (1912) *The Works of Thomas Deloney*, but himselfe being sore wounded, and faint with ouermuch bleeding, at length fell downe, being not able any longer to stand (Wada 1975: 19)

(4a) は、通例 not は本動詞や時制標識の場合はその後に、分詞の場合はその前に置かれることを、(4b) は、not を助動詞 being ないしは having と過去分詞との間に割り込ませた being not PP / having not PP は、耳障りでよろしくないと述べている。Söderlind (1958: 158 & n. 1) と Wada (1975: 19) には、Dryden と Deloney の作品に、coming と being に not が後置されている構造がそれぞれ発見された点が報じられており、(4c, d) はその用例である。

しかしながら、6 節に示されているように、筆者の調査からは、(4a, b) の Bullokar や Priestley の言説はあまりに一掃的過ぎ、史実に反することがわかる。筆者の主張したい点は、not 後置型現在分詞は歴史的には決してまれな構造とはいえない点、ある一群の動詞が大勢の人々によって使われていたことを根拠に、not 後置型現在分詞の構造は当時の文法の一部だったのではなかろうか、少なくとも誤用などではなかった、という点である。さらに、not 後置型現在分詞は、かつて定形動詞節において do を伴わずに用いられた「動詞 + not」型否定平叙文が投影された構造だったのではなかろうかという点である。

4. 調査資料

調査資料は、論文末に示されている 16-20 世紀日記・書簡テキスト 101 種 130 冊である。³⁾

5. 用例の包含／除外の基準

どのような用例を含め除くかによって統計値は大きく変動する。そこで、本節には、用例の包含と除外に関し、諸家によって判断が分かれるかもしれないと思われる文について、筆者の判断基準を示した。

5.1. 包含

現在分詞の用例のほとんどは、いわゆる分詞構文のような副詞的用法であるが、少数ながら、(5)のように名詞を修飾する形容詞的用法も含まれている。名詞が先行する例ばかり発見され、not は常に現在分詞に前置されている。用例は、頻度順に、exceed, surmount, breathe, depend, have, lead, possess などの動詞に集中している。

- (5) 1667 J. Milward, *Diary*, 75, This day was read the bill for preventing fightings and disorders of seamen at their pay day; power was given to the officers of the Naval forces to punish any such disorders, by fining such as should fight and be disorderly, the fine not exceeding one pound,

to-不定詞を従えた willing は分詞形容詞であると考え、not を伴ったその例は考慮外としたが、(that) 節や、「人をあらわす目的語 + to-不定詞」を従えている willing の例は、動詞の一形態たる現在分詞であるとして含めた。すべて not が前置された構造だった。

- (6) 1699 J. Evelyn, *Diary*, V 347, not willing any should persist in sinn, & be lost.
1796 W. B. Stevens, *Journal*, 351, when she inserted her last note into Jones's Letter, not willing that He should know the contents,

動名詞の用例のほとんどは、文の主語や動詞ないしは前置詞の目的語の例であるが、まれに(7)のような 'sentence/clause-kernel' (Söderlind 1958: 184) の用例が見られる。このような文相当のはたらきをする動名詞用法も用例に含められている。

- (7) 1786 J. Woodforde, *Diary*, II 229, Mr. Cary not going this week.

次の(8)の例文において、-ing 形の意味上の主語が主格形 He/he になっていないが、当時の英語には散見されるので、これらは分詞の用例として処理した。

- (8) 1736 J. Wesley, *Journal*, 14, His not going so soon, I went to Ashley-Ferry on Thursday,

1780 J. Woodforde, *Diary*, I 296, he is going to leave the Ariadne, the Captain whose name is Squire and him not agreeing

1799 J. Woodforde, *Diary*, V 223, but his not being at home, William returned home to dinner

出版を意図しない日記・書簡を調査すると、不自然な語法に出くわすことがある。次の(9)において、編者 J. Bruce が補っているように ‘hearing’ であれば何ら問題ないのだが、書き手チャールズI世は目的語を記すことなく ‘having’ を使っている。編者の解釈は正しいと思われるが、最終的にこの例は、not 後置型現在分詞 having の例として処理した。

(9) 1646 King Charles, *Letters*, 76, having [hearing?] yet not certainly neither from thee nor Ireland concerning it, I will not . . . engage myself in it before I know thy opinion,

なお、用例が前後するが、(3c) や、(36) の 1679 H. Savile のように、not が「形容詞の最上級 + 名詞」や「a (single) / an / one + 名詞」、(in) the least / at all などの negative intensifier と共起している例文は含めた。表 2 のとおり、単純現在分詞として not 前置構造が 3 例、後置構造が 11 例、単純動名詞として not 後置構造が 1 例出現した。

表 2 not が negative intensifier と共起するときの not 前置型構造と後置型構造の競合

a. 単純現在分詞の場合

	前置	後置
-1649		
1650-1699	say (1) see (1)	afford (1) be (1) find (1)
1700-1749		
1750-1799		be (1) have (1) leave (1)
1800-1849	be (1)	have (1) say (1)
1850-1899		have (1) take (1)
1900-		occupy (1)

b. 単純動名詞の場合

	前置	後置
-1649		
1650-1699		say (1)
1700-		

5.2. 除外⁴⁾

局所否定の例文は除外した。たとえば, (10) の not が否定しているのは, a においては long, b においては不定詞句 to permit 以下, c においては safe, d においては a little, e においては only her mistress, f においては more (than sixty feet) であり, 下線をつけた分詞ではない。

- (10) a. 1666 S. Pepys, *Diary*, VII 203, he was not up – being not long since married;
- b. 1673 H. Ball, in W. D. Christie, ed., *Letters Addressed . . . to Sir Joseph Williamson*, II 44, Mr. Seymour . . . cannot hold his place, because he is a Privy Councillor, the custome of the house being not to permit him to come to Court or beare any office without their leave dureing the time of its Session,
- c. 1673 R. Yard, in W. D. Christie, ed., *Letters Addressed . . . to Sir Joseph Williamson*, I 143, the officers thinking it not safe to putt the articles lately published in execution, on this side of the water;
- d. 1738 J. Wesley, *Journal*, 33, Afterwards I . . . gave them a short but plain account of the state of the colony: an account, I fear, not a little differing from those which they had frequently received before,
- e. 1797 A. Hughes, 137, all the praise should go to the dear mistress who had done so much for her, bein [sic] not only her mistress but her dear respected friend;
- f. 1850 T. H. Huxley, 325, The fall was very pretty; much the same style of place as the Chamarelle, only not so grand, being not more than sixty feet, but then in compensation, there was a much larger body of water.

(11) も局所否定の一種である。not が否定しているのは下線部の現在分詞ではなく直後の to-不定詞であると考えられる。⁵⁾ *advise / beg / beseech / caution / encourage / exhort / hold / induce / persuade / petition / plead / pray / procure / promise / urge / warn / etc.* + 目的語 + to-不定詞; *affect / agree / appear / desire / determine / happen / intend / mean / mind / pretend / resolve / suppose / try / vow / wish / etc.* + to-不定詞に典型的に見られる構造である。

(11) 1660 S. Pepys, *Diary*, I 133, so that I sent for Mr. Pitts to come to me from the Vice-Admirall, entending not to have imployed Burr any more.

1702 P. Skinner, in *Private Correspondence and Miscellaneous Papers of Samuel Pepys*, II 289, Beseeching Heaven not to cutt it shorter,

1772 J. Wesley, *Journal*, 374, Resolving not to shoot over their heads, as I had done the day before, I spoke strongly of death and judgment, heaven and hell.

1825 H. Arbuthnot, I 393, Lord Bathurst has written to him urging him not to retire,

1827 W. E. Gladstone 118, wishing not to have a very long debate, kept me from speaking

1830 T. Raikes, 41, promising not to write again without something else to say,

OEDによれば、(12)に使われている-ing形は、それぞれの時期においてもはや現在分詞ではなく前置詞／形容詞に転化していると考えられるため、考慮外とした。他に *according to*, *adjoining*, *excluding*, *exhilarating*, *favouring*, *flattering*, *including*, *owing to*, *touching* などがある。

(12) 1695 W. Gilpin, in *Correspondence of J. Lowther*, 254, not withstanding all this dust I find he is not yet ready for Mr Howard;

1697 Evelyn, *Diary*, V 263, The severe frost & weather not relenting, and freezing with snow, againe kept us from Church:

1751 J. Wesley, *Journal*, 197, We rode to Edinburgh; one of the dirtiest cities I had ever seen, not excepting Cölen in Germany.

1873 A. C. Swinburne, *Letters*, I 119, There are also other matters connected with Hotten about which I want your advice—books of mine in his hands, and papers not relating to this matter.

詩行に現われた分詞／動名詞の否定も考慮外とした。詩には韻律上の特別の要請がはたらくためである。(13)の7例は除外した。

(13) 1640 J. Rous, *Diary*, not offering | 1794 R. Southey, *New Letters*, 65, not sorrow-

ing | ^{????}W. Wordsworth, in D. Wordsworth, *Journals*, 181, conversing
 not | ^{????}J. Skinner, *Journal*, 499, not knowing | *Ibid*, not boasting | 1836 J.
 Ruskin, *Family Letters*, I 322, not knowing | 1890 O. Wilde, *More Letters*, 90,
 not knowing

次の (14) は、手書き原稿の不備のために編者が部分補筆した文である。編者の判断は誤っているわけではないが、すべて除外した。1664 S. Pepys と 1665 S. Pepys においては、それぞれ being と been を補うべきことが示唆されているが、何もそれらの語である必要はなく、Pepys は存在をあらわす別の動詞を意図していたかもしれない。1667 S. Pepys は、原稿は from であるがそれでは意味が通らないため、not に変更したことが脚注に示されている。しかし、Pepys が意図していた語は、否定を含意する他の副詞だったかもしれない。同様に、1801 R. Southey においても、他の動詞の可能性を拭いきることはできない。1836 S. Palmer における編者の補筆は極めて妥当であると考えられるが、慎重を期して除外した。

- (14) 1664 S. Pepys, *Diary*, V 171, there not <being> a more furious man in the world, danger in fight never disturbs him,
 1665 S. Pepys, *Diary*, VI 204, Up; and being ready, I out to Mr. Colvill the goldsmith's, having not for some days <been> in the streets.
 1667 S. Pepys, *Diary*, VIII 495, his greatest failure was (that I observed) from his not^e considering whether the Question propounded was his part to answer to or no, [e MS. 'from']
 1801 R. Southey, *New Letters*, 259, I have been expecting them since Friday—and growling at the lazy and uncivil trick of not [writing] to prevent expectation.
 1836 S. Palmer, *Letters*, I 75, Mine, however, you will call a cracked fiddle, not have[ing] heard from me yet;

次の文は、Morelli の書いた 17 世紀フランス語の手紙を 19 世紀人 J. Smith が

英訳したものである。考慮外とした。

- (15) 1679 C. Morelli, in *Letters and the Second Diary of Samuel Pepys*, 83, my not having been known at Lisbon as a priest,

次の文では、当該部分は大幅な省略ないしは代用構造がとられている。not 後置型複合分詞の用例には含めず、除外した。

- (16) 1701 J. Jackson, in Tanner, ed., *Private Correspondence and Miscellaneous Papers of Samuel Pepys*, II 195, I had been gone 'ere this from hence, had my companion used the same diligence as myselfe; but [Nakamura my companion Nakamura] having not [Nakamura used the same diligence Nakamura], I fear 'twill be Sunday before wee sett-out for Seville.

6. 16-20世紀日記・書簡資料における調査結果

単純現在分詞 Verb-ing に対して not がどのような相対的位置を取るか、その歴史的相剋は表3のとおりである。表3には25年単位と50年単位の2種類の数値が示されている。たとえば、1600-1624年に書かれた日記・書簡に、not 前置型が2例、後置型が24例、1625-1649年には前置型が64例、後置型が7例、合わせると、1600-1649年の50年間に not 前置型が66例後置型が31例現われたことを示している。表3から、後置構造は1700年までは相当数使用されていたことがわかる。

さらに、表3の50年ごとの前置型と後置型の競合の様子をグラフであらわすと、グラフ1のようになる。現代英語についての表1a-cでは決して10%を越えることがなかったのと対照的である。但し、グラフの先頭の1599年までの not 後置型のグラフ値は、70%強と著しく高い数値を示しているが、前置型2例に対し後置型5例という乏しい実数が根拠になっているにすぎず、割り引いて考える必要がある。グラフ1から、後置構造は1700年までは相当数使用されていたが、その後は現代英語に向かって確実に衰退の一途をたどっていることが明らかである。

表3 単純現在分詞 Verb-ing に対する not の相対的位置—日記・書簡資料

	25 年単位		50 年単位	
	前置	後置	前置	後置
-1599	2	5	2	5
1600-1624	2	24	66	31
1625-1649	64	7		
1650-1674	553 ₊₄	100	803 ₊₅	132
1675-1699	250 ₊₁	32	220 ₊₁	17
1700-1724	165 ₊₁	14		
1725-1749	55	3	237 ₊₁	22
1750-1774	79 ₊₁	6		
1775-1799	158	16	320 ₊₃	11 ₊₁
1800-1824	155	9		
1825-1849	165 ₊₃	2 ₊₁	150 ₊₄	9
1850-1874	119 ₊₄	8		
1875-1899	31	1	24	1
1900-1924	3	0		
1925-	21	1		

Total 動詞数 291 用例総数 1,822₊₁₄ : 228₊₁

表3の注：プラス記号の次の数値は、次の例文の liking のように、等位第2要素の用例であることを示す。

1668 S. Pepys, *Diary*, IX 14, not finding them, nor liking either of the plays, I took my coach again and home,

グラフ1 日記・書簡資料における not 前置型単純現在分詞と後置型単純現在分詞の競合—50年単位

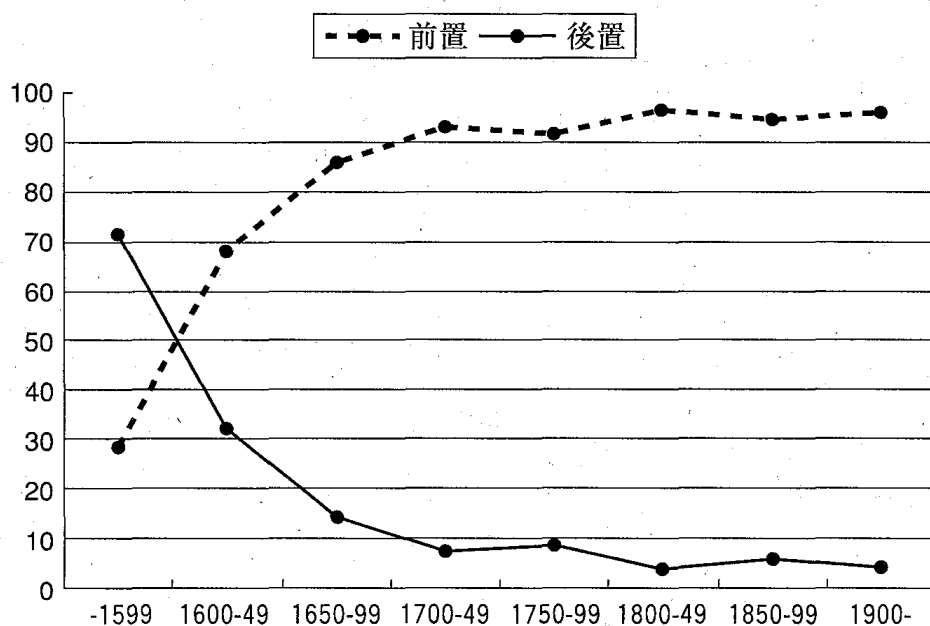


表4は、not 後置型単純現在分詞をとる動詞の種類と、前置対後置の歴史的推移をあらわす。後置型はとりわけ *be*, *have*, *know*, *come*, *do*, *find* に現われており、後置構造は生産的であるとはいえない。OEDによれば、表4の動詞はいずれも16世紀半ば以前に動詞用法の初出が確認される動詞である。言い換えれば、1550年以降に誕生した新動詞がnot 後置型単純現在分詞をとることはない。

表4 not 後置型単純現在分詞をとる動詞と前置対後置の歴史的推移—日記・書簡資料

	<i>be</i>		<i>have</i>		<i>know</i>		<i>care</i>		<i>come</i>		<i>do</i>	
-1599	2	5										
1600-1649	9	28	6	1	8	0	1	0	1	0	1	0
1650-1699	252 ⁺¹	92	37	21	77	2			35	5	1	2
1700-1749	35	11	20	4	35	0	1	0	1	0	1	0
1750-1799	64	15	16	5	35	0			3	0		
1800-1849	86	8	21	⁺¹	37	0	3	1	2	0	1	0
1850-1899	32	4	11	2	23	0					⁺¹	0
1900-	2	0	1	0	3	0						

	<i>find</i>		<i>meet</i>		<i>need</i>		<i>say</i>		<i>see</i>	
-1599										
1600-1649	1	1					1	0	1	0
1650-1699	28	2	9	1	0	1	1	0	10	1
1700-1749	8	0	2	0						
1750-1799	2	1	1	0			1	0		
1800-1849	5	0	1	0			0	1	4	0
1850-1899	3	1								
1900-							1	0		

その他の動詞（後置型が各1例出現 前置型の生起数は割愛）	
-1599	
1600-1649	<i>return</i>
1650-1699	<i>afford</i> <i>consist</i> <i>contain</i> <i>examine</i> <i>write</i>
1700-1749	<i>amount</i> <i>reach</i>
1750-1799	<i>leave</i>
1800-1849	<i>feel</i>
1850-1899	<i>open</i> <i>take</i>
1900-	<i>occupy</i>

語法的観点から、not 前置型単純現在分詞も後置型もほぼ同じ言語環境に現われる。事実上交替可能である。たとえば、(17)-(19)の3組の文が示すように、前置型と後置型の間にはほとんど意味の差はない。否定の範囲に差があるわけでもない。⁶⁾

- (17) a. 1660 S. Pepys, *Diary*, I 124, dinner not being ready, I went with Captain Hayward to the *Plimouth* and *Essex*,
 b. 1664 S. Pepys, *Diary*, V 305, That [=a flagon to be carried to Woolwich] being not ready, I stepped aside and found out Nellson,
- (18) a. 1660 S. Pepys, *Diary*, I 265, my Lord not being up, I went out to Charingcross
 b. 1666 S. Pepys, *Diary*, VII 97, who being not up, I took a walk with Balty into the park.
- (19) a. 1660 S. Pepys, *Diary*, I 41, my Lady not being within, I spoke to Mrs Carter about it,
 b. 1660 S. Pepys, *Diary*, I 73, he being not within, I went up,

また、(20)-(22) の 3 組の文が示すように、分詞節 ((s) -ing) が主節 (SV) に先行するか後に来るか、あるいは主部と述部の間に割り込んでいるか、というような統語環境が前置型／後置型という 2 つの統語的異形の選択を決定しているわけでもない。要するに、両者は相補分布を示してはいない。

(20) <s -ing (S)V>

- a. 1661 S. Pepys, *Diary*, II 61, my wife not being well, she kept her chamber all this day.
 b. 1664 S. Pepys, *Diary*, V 132, my Lady being not well, kept her chamber.

(21) <S -ing V>

- a. 1661 S. Pepys, *Diary*, II 199, I not being neat in clothes . . . could not be so merry as otherwise and at all times I am and can be,
 b. 1665 S. Pepys, *Diary*, VI 73, and then . . . to a play at the Dukes of my Lord Orerey's, called *Mustapha* - which being not good, made Baterton's part and Ianthes but ordinary too, so that we were not contented with it at all.

(22) <SV s -ing>

- a. 1663 S. Pepys, *Diary*, IV 194, So late at my office and then home to supper - and to bed, my man Will not being well.
- b. 1662 S. Pepys, *Diary*, III 44, all the afternoon rumaging of papers in my chamber and tearing some and sorting others till late at night, and so to bed - my wife being not well all this day.

さらに、being の場合、そのあとに名詞／形容詞／副詞相当語句のどれが続いているかという点も、異形の選択に関与していない。前置型も後置型も、分け隔てなく名詞／形容詞／副詞相当語句を従えている。

Not 後置型単純現在分詞をとる動詞は、be に明らかな偏りはあるが、(23)-(29) の例文が示すとおり、その他の動詞も後置型をとることが確認できる。後置型に使われている動詞の数は、既に表 4 に挙がっているように、24 動詞に上り、用例総数は 228₊₁ に上る。

- (23) a. 1660 S. Pepys, *Diary*, I 310, he not coming, I went to my father's.
b. (= 1a) 1669 S. Pepys, *Diary*, IX 461, she coming not, I went to her husband's chamber
- (24) a. 1668 S. Pepys, *Diary*, IX 192, Which they not presently doing, they were all inflamed,
b. 1665 S. Pepys, *Diary*, VI 75, Thence to Westminster-hall and up and down, doing not much;
- (25) a. 1661 S. Pepys, *Diary*, II 154, he and I to the Dolphin but not finding Sir W. Batten there, we went and carried a bottle of wine to his house
b. 1668 S. Pepys, *Diary*, IX 14, but I finding him not there, nor the Duke of York within, I away by coach to the Nursery,
- (26) a. 1662 S. Pepys, *Diary*, III 269, not having time to do anything, I went toward my Lord Sandwichs

- b. 1660 S. Pepys, *Diary*, I 215, To bed, having not time to write letters;
- (27) a. 1661 S. Pepys, *Diary*, II 169-70, he could not advise me to any thing therein, not knowing what the other hath done in the country,
- b. 1663 S. Pepys, *Diary*, IV 22, Called at my brother's and find him sick in bed of a pain in the sole of one of his feet, without swelling; knowing not how it came, but it will not suffer him to stand these two days.
- (28) a. 1666 S. Pepys, *Diary*, VII 391, not meeting her, I home
- b. 1660 S. Pepys, *Diary*, I 261, meeting not Mr. Sheply there, I went home
- (29) a. 1667 S. Pepys, *Diary*, VIII 102, not seeing her whom I love, I by water to White-hall
- b. 1663 S. Pepys, *Diary*, IV 291, seeing not my wife there, went out again.

最後に、表 5 が示すように、not 後置型単純現在分詞は、国王の英語から High Church English を用いる聖職者や当代きっての文人の英語に至るまで、教育を受けた人にも上流階級の人にも使用されている。⁷⁾

表 5 not 後置型単純現在分詞の主な使用者—日記・書簡資料

17c	Bp. of London	H. Ball	W. Bedell	King Charles I
	R. Davies	T. Derham	G. Etherege	J. Evelyn
	J. Glanville	W. Gilpin	M. Hoby	R. Josselin
	Sir C. Lyttleton	S. Pepys	T. Povey	H. Wanley
18c	D. Defoe	R. Gale	J. Gay	T. Gray
	E. Halley	J. Hudson	J. Jackson	H. Jolley
	H. More	W. Shenstone	P. Skinner	W. B. Stevenson
	J. Swift	J. Wedgwood	J. Wesley	J. Woodforde
19c	Mrs. Arbuthnot	E. Buxton	T. Carlyle	F. Kilvert
	S. Palmer	A. Tennyson	M. Todd	
20c	H. Macmillan			

以上のように、5 節に示した幾多の事実から、not 後置型単純現在分詞の歴史に関して、(30) のようにまとめることができる。

- (30) a. 歴史的観点から、not 後置型単純現在分詞は17世紀に盛華期にあったが、be/haveを除き、18世紀中頃に事実上衰退した。be/haveも、18世紀末までには前置型にほぼ屈した。
- b. 動詞の種類観点から、not 後置型単純現在分詞は、とりわけ be, have, know, come, do, find のような閉じられた類の動詞とともに使われた。
- c. 調査したいかなる資料においても、1550年以降に誕生した新動詞が not 後置型単純現在分詞をとることはない。新しく誕生した動詞は、大規則に従い、圧倒的大多数の動詞がとる前置型に属す。
- d. 語法的観点から、not 前置型も後置型もほぼ同じ言語環境に現われる。事実上交替可能である。
- e. 語法使用者という観点から、教育を受けた人にも上流階級の人にも使用された。

この語法に「誤用」という烙印を押すことがいかに憚れるか明らかである。頻度と使用者の両面から、かつては単なる誤用ではなかったと考えられる。われわれは今、not 後置型単純現在分詞について、史実の修正を行わなければならない。

7. not 後置型単純現在分詞を生みだした要因

not 後置型単純現在分詞構造を生みだした要因は何であろうか。すでに述べたように、前置構造と後置構造はほぼ同じ言語環境に現われるため、後置型が使われる要因を意味・構造的要因に求めることには無理がある。別の理由付けを考えつく必要がある。筆者は、言語変化は、単一の要因で変化する事例は少なく、多くは複数の要因が輻輳して変化するという立場を取っている。言語内の・言語外的の両面から変化の要因を探りたいと考えているが、not 後置型単純現在分詞を生みだした要因に関する限り、本節に提案されているように、結果的に内的要因しか思いつかなかった。⁸⁾

7.1. not の遊離性

1つの考え方として、not の位置の遊離性を挙げることができる。(31)に示されているように、現代英語では High Church English を除き許容されることのない、あるいは容認度の低い not の使われ方が、近代英語期には許容されていた。たとえば (31a) の構造において、現代標準英語では普通 not は Aux と *have* の間に位置する。(31b) では Aux と *be* の間に、(31c) では *have/had* と PP の間に、(31d) では *have* と PP の間に、(31e) では Aux と V の間に not は挿入される。また、(31f) や (31g) では *had better/best* の直後に、(31h) や (31i) では to-不定詞の直前に置かれるのが標準である。このような not の位置の自由さが-ing 形にも適用され、not は-ing 形の前位置だけでなく後位置も占めることができた、という考え方である。⁹⁾

(31) a. Aux *have* __ PP

1800 G. Rose, 275, I should really have not said even so much as this if I had not been desired to call to your recollection the situation of another.

b. Aux *be* __ PP

1644 R. Symonds, 152, The King consented; he required a passe, and the King denied, because he would be not seene to consent to his going.

c. *have/had* PP __

1766 J. Penrose, 138, Fanny desires Mary to excuse her not writing this Post: she has had not Time, but hopes nothing will hinder her writing next Post.

1792 W. B. Stevens, 7, when I have known not where to look for Refuge,

1815 C. S. M. Campbell, 390, into which the spite and malice and sin of the Evil One have entered not;

d. __ *have* PP

1774 G. White, 49, Swifts not have appear'd for these two evenings.

e. Aux V __

1791 J. Woodforde, III 250, I . . . told her that I hoped she might repent not of

what she was about to do.

1797 A. Hughes, 127, I fear I shall like not for her to go,

f. *had* ___ *better/best*

1710 J. Swift, I 98, whether he had not better stay till to-morrow.

g. *had better be* ___ PP

1757 T. Gray, II 508, it had better be not understood at all.

h. *to*-infinitive ___

1667 Pepys, *Diary*, 80-81, the Duch are in very great straits, so as to be said to be not able to set out their fleet this year.

1667 S. Pepys, *Diary*, VIII 203, the fellow did think to have not had it discovered.

1794 E. Darwin, 266, but I believe them all to be not fever-producing, till they have been oxygenated.

1818 D. Wordsworth, *Letters*, 153, the stillness seemed to be not of this world.

i. *to* ___ infinitive

1815 M. Todd, 105, Here we were obliged to show passports and give half a paulo each to the Custom House Officers, to not overhaul our baggage

しかしながら、not の遊離性に起因させるこの考え方は、安易かつ消極的な理由づけであると考えられる。表4でみたように後置構造が一群の動詞に集中している事実や、7.4.3. 節で検討されているように、単純動名詞には後置構造がほとんど生じなかったという事実を説明することができないためである。

7.2. 意味的要因—曖昧回避

次に、後置型の用例の中には、意味的理由で説明できなくはないものもある。たとえば、(32)において、not が reaching の前に置かれた場合 being imperfect まで打ち消してしまう可能性がでるため (つまり、a (b+c) に誤解される恐れが出るため)、意味の曖昧性回避のために、つまり ab+c であることを正確に示すた

めに, not は reaching に後置されたのではなかろうかという考え方である。分詞が2つ以上等位された場合, 否定の範囲を明確にするための一手段だったと捉えることができなくもない。

(32) 1701 J. Hudson, in *Original Letters of Eminent Literary Men*, 302, and I wish you would try Smith & Walford for Cowper's Anatomy, and the Philosophical Transactions, our sett reaching not far, and being imperfect in the first Volumes.

しかしながら, 等位された用例数自体全部で 15 例にすぎず, しかも後置型 1 例に対し前置型は 14 例もあり, 前置構造が普通であるため, この考え方は一般性ある説明にはなりえない。また, 仮に not が reaching に前置されていたとしても, 文脈から最初の-ing だけが否定されていることは明白なので, 曖昧回避説は末梢的な要因でしかありえない。

7.3. 構造的要因—結果的後置

(33) では, 異質な 2 つの要素である過去分詞と名詞句が等位されているが, having を繰り返さなかったために結果的に後置になっているだけのことで, これも要因とは言えない。本来なら除外すべきだった用例かもしれない。

(33) 1841 J. Clare, 294, Having left the Forest in a hurry & not time to take my leave of you & your family

7.4. 最大の要因—定形動詞節において do を伴わない否定形式の投影

最終的に筆者が最も有力だと考えるのは, 定形動詞節における do を伴わない否定形式が, つまり Verb + not が, 非定形動詞たる単純現在分詞に Verb-ing + not として投影されたのではなかろうかという理由づけである。証拠は, be や have, ought to-不定詞のような marginal auxiliary に加えて, 否定平叙文において助動詞 do に遅くまで抵抗を示し続けた動詞は (34) のとおりであるが, これらの動詞と表 4 の動詞とは著しく重複しているからである。¹⁰⁾

(34) a. know, care, doubt, mistake; wot(te), boot, trow, fear, list, skill; ask; question, say; come, deny, intend, speak, think; die, do, find, grieve, help, love, matter,

move, see

(Nakamura 1988: 133)

b. 日記 *care, come, doubt, know, love, stay*

書簡 *doubt, know, mistake, need, question* (= 'doubt'), *value*

(中村 1997: 114)

つまり、定形動詞表現 *I am/have/know/care/come/etc. not ...* の *not* の語順が、非定形で動詞性をもつ現在分詞表現 *being/having/knowing/caring/coming/etc. not ...* でも維持されたという考え方である。「定形動詞節において *do* を伴わない否定形式の投影」が最大の要因と考えられる背景には、いくつかの二次的証拠がある。

7.4.1. 「定形動詞節において *do* を伴わない否定形式の投影」説の証拠—

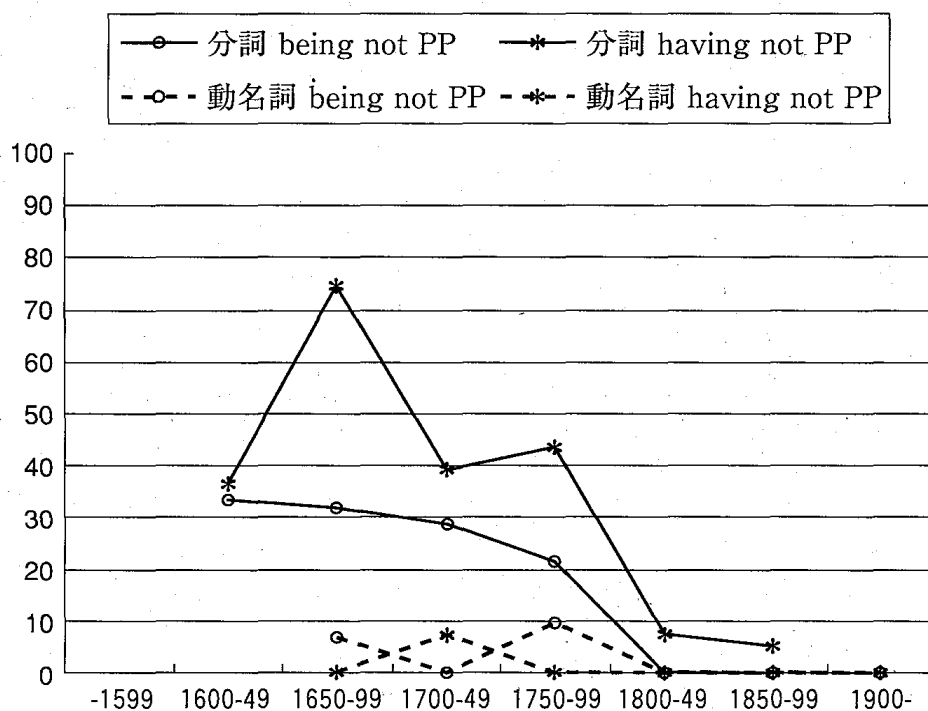
(1) 複合現在分詞における *not* 後置率の高さ

第1の証拠は、複合現在分詞は時制／相／態をもっているため単純現在分詞よりも動詞性が高く、それに応じて *not* 後置型の比率が高まることが予想されるが、事実もまさしくそのとおりであるという点である。表6と、その50年単位の欄の数値をグラフ化したグラフ2の上の2本の実線で描かれたグラフが示すとおりである。グラフの最も高い位置にあるのが完了の *having* PP の *not* 後置率、2番目に高いのが受身ないしは完了の *being* PP の *not* 後置率である。両者とも、単純現在分詞よりも動詞性が高いためか、グラフ1に示した単純現在分詞の後置率よりもはるかに高い位置を保っている。特に1650年から1699年にかけての *having* PP の前置対後置の生起数が23例対67例、つまり後置率が74%である点は驚異的である。

表6 複合現在分詞 passive/perfective *being* + PP 及び perfective *having* + PP に対する not の相対的位置—日記・書簡資料

受身/完了の <i>being</i> + PP				Period	完了の <i>having</i> + PP			
25 年単位		50 年単位			50 年単位		25 年単位	
前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置	
0	1	0	1	-1599	0	0	0	0
1	0	8	4	1600-1624	7	4	0	0
7	4			1625-1649			7	4
53 ₊₁	25	73 ₊₂	35	1650-1674	23	67	9	59
20 ₊₁	10			1675-1699			14	8
14	8	25	10	1700-1724	23	15	14	15
11	2			1725-1749			9	0
5	0	21 ₊₁	6	1750-1774	13	10	7	5
16 ₊₁	6			1775-1799			6	5
14 ₊₁	0	23 ₊₁	0	1800-1824	38	3	22	1
9	0			1825-1849			16	2
4	0	7	0	1850-1874	20	1	16	1
3	0			1875-1899			4	0
0	0	0	0	1900-1924	2	0	0	0
0	0			1925-			2	0
157 ₊₄ : 55				Total	126 : 100			

グラフ2 日記・書簡資料における not 後置型複合現在分詞と not 後置型複合動名詞の推移—50 年単位



7.4.2. 「定形動詞節において do を伴わない否定形式の投影」説の証拠—

(2) 複合動名詞における not 後置率の低さ

逆に、動詞性が弱いと、つまり be PP や have PP であっても動名詞で使われていると、not 後置型の頻度が格段に下がる。表7と、グラフ2の底辺を這っている破線で描かれた2本のグラフが示すとおりである。

表7 複合動名詞 passive/perfective *being* + PP 及び perfective *having* + PP に対する not の相対的位置—日記・書簡資料

受身/完了の <i>being</i> + PP				Period	完了の <i>having</i> + PP			
25年単位		50年単位			50年単位		25年単位	
前置	後置	前置	後置	前置	後置	前置	後置	
0	0	0	0	-1599	0	0	0	0
0	0	0	0	1600-1624	2	0	0	0
0	0			1625-1649			2	0
11	0	14	1	1650-1674	11	0	7	0
3	1			1675-1699			4	0
2	0	7	0	1700-1724	26	2	6	1
5	0			1725-1749			20	1
3	0	19	2	1750-1774	31	0	18	0
16	2			1775-1799			13	0
11	0	21	0	1800-1824	59 ₊₁	0	38 ₊₁	0
10	0			1825-1849			21	0
2	0	10	0	1850-1874	35	0	25	0
8	0			1875-1899			10	0
0	0	3	0	1900-1924	5	0	0	0
3	0			1925-			5	0
74 : 3				Total	169 ₊₁ : 2			

not 後置型の5例は次のとおりである。

(35) 1699 S. Pepys, in J. R. Tanner, ed., *Private Correspondence*, I 202, Between my comeing thus farr and the sealeing it, your 3d most unwellcome notice of your being not gone the 17th is come to hand.

1775 J. Woodforde, *Diary*, I 168, I went down to Sister Clarke's this morning and made her a visit, she is not at all pleased in being not invited to the Christening yesterday—

1791 J. Woodforde, *Diary*, III 249, I was rather out of temper this Aft. on Ac-

count of my Maid's (Nanny Kaye) Banns being not published this Afternoon by me,

1713 J. Swift, *Journal to Stella*, II 670, Having not used riding these 3 years, made me terrible weary; yet I resolve on Monday to sett out for Holyhead, as weary as I am.

1727 A. Pope, in L. Melville, ed., *Life and Letters of John Gay*, 71, You will enjoy that, and your own integrity, and the satisfactory consciousness of having not merited such graces from Courts as are bestowed only on the mean, servile, flattering, interested and undeserving.

7.4.3. 「定形動詞節において do を伴わない否定形式の投影」説の証拠—

(3) 単純動名詞における not 後置率の低さ

こうなると、当然の予測として、動詞性の最も低い、時制／相／態を含まない単純動名詞だと、グラフはさらに x 軸を這うであろうと考えられる。事実、表 8 のとおり、130 冊の資料中 not 後置型構造をとっていたのはほんの 6 例だけだった。グラフ 3 の示すとおり、not 後置型のグラフは、調査資料のいかなる時期においても地を這うが如しである。動詞の内訳は、表 9 の示すとおり、be が 5 例 say が 1 例で、用例は (36) のとおりである。すべての例において、動名詞は意味上の主語をもち、文相当の内容を伝えている。それらのうち 1679 H. Savile の例は、not を negative intensifier である 'a word' と連続させ、否定の意味を強める方策がとられている。

(36) 1660 S. Pepys, *Diary*, I 226, many of my things are quite spoiled with mould, by reason of lying so long a-shipboard and my cabin being not tight.

1673 H. Ball, in W. D. Christie, ed., *Letters Addressed . . . to Sir Joseph Williamson*, II 99, My Lady of Northumberland has miscarried and is very ill this weeke, which is increased by her husband's being not yett free from his restraint.

1678 S. Pepys, in H. T. Heath, ed., *Letters of Samuel Pepys*, 58, For what you suspect of his being not soe well affected towards me (though that's noe new

表8 単純動名詞 Verb-ing に対する not の相対的位置—日記・書簡資料

Period	25年単位		50年単位	
	前置	後置	前置	後置
-1599	1	0	1	0
1600-1624	2	0	18	0
1625-1649	16	0		
1650-1674	211 ₊₁	2	371 ₊₁	4
1675-1699	160	2		
1700-1724	93	0	208 ₊₂	0
1725-1749	115 ₊₂	0		
1750-1774	141	1	257 ₊₁	2
1775-1799	116 ₊₁	1		
1800-1824	168	0	318 ₊₂	0
1825-1849	150 ₊₂	0		
1850-1874	105 ₊₁	0	155 ₊₁	0
1875-1899	50	0		
1900-1924	1	0	32	0
1925-	31	0		

Total 動詞数 299 用例総数 1,360₊₇ : 6

グラフ3 日記・書簡資料における not 前置型単純動名詞と後置型単純動名詞の競合—50年単位

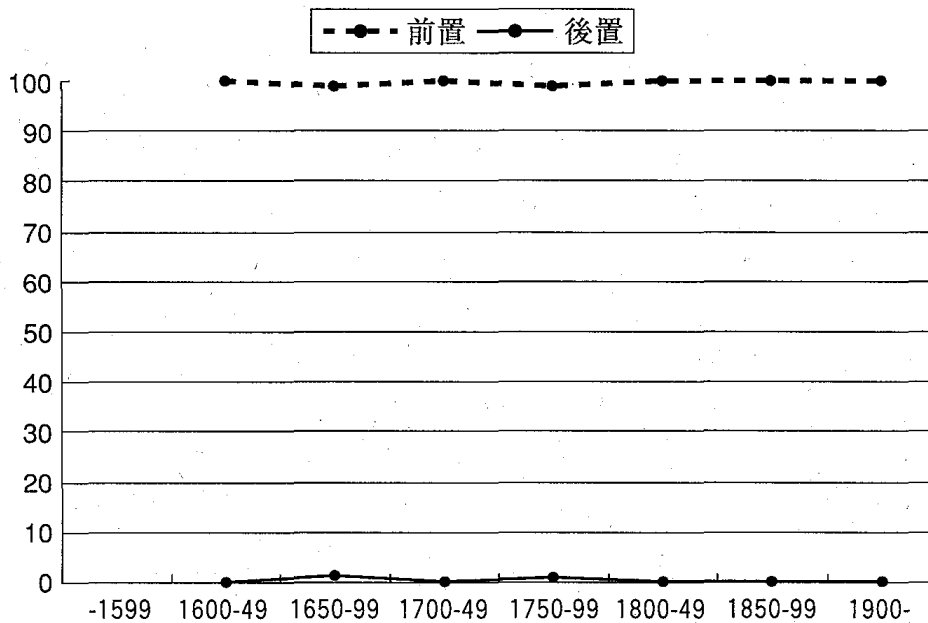


表 9 not 後置型単純動名詞をとる動詞と前置対後置の歴史的推移—日記・書簡資料

	<i>be</i>		<i>have</i>		<i>know</i>		<i>care</i>		<i>come</i>		<i>do</i>	
1600-1649					1	0			1	0	1	0
1650-1699	52	3	19	0	11	0	2	0	15	0	15	0
1700-1749	21	0	12	0			1	0	7	0	10	0
1750-1799	29	2	6	0	1	0			15	0	5	0
1800-1849	44	0	17	0	6	0			10	0	4	0
1850-1899	18	0	6	0	2	0	1	0	6	0	4	0
1900-	8	0	5	0			1	0				

	<i>find</i>		<i>meet</i>		<i>need</i>		<i>say</i>		<i>see</i>	
1600-1649							1	0		
1650-1699	5	0	1	0			0	1	6	0
1700-1749	1	0	2	0			1	0	4	0
1750-1799			1	0			1	0	12	0
1800-1849	6	0	1	0			1	0	7	0
1850-1899							1	0	3	0
1900-										

thing for me to meet with from Some Commanders);

1767 J. Penrose, *Letters from Bath*, 200, We concluded, that neither your Methleigh Jaunt, nor want of a Frank, nor it's being not regular Day of Writing, would have hindered you from acknowledging the Receipt of my Letter.

1789 J. Woodforde, *Diary*, III 94, When at last in great haste there came one—and the reason of its being not here before, was, that Raven at the Kings Head to whom I had sent a Note, had entirely forgot it.

1679 H. Savile, *Correspondence*, 94, instead of saying not a word of it, as I should have thought the best way, I am now fain to turn it into ridicule as the second best,

7.5. まとめ

以上 7.4.1.-7.4.3. に証拠付けされたように、否定平叙文 *I am not a doctor, I have not a sister, I know not the news.* のような「動詞 + not」の連鎖が、そのまま動詞性の強い単純現在分詞の Verb-ing not 否定形式に投影されたのではないかと考えることができる。そして、もしそうだとすると、「動詞 + not」形式の否定平叙文が衰えると、not 後置型現在分詞も後を追うように廃れていくことが予測される。いわば、両者は同じ船に乗っているからである。グラフ 1 はまさにそれ

を物語っている。つまり、I say not 型否定が通例だった時代は、not 後置型単純現在分詞がしばしば使われたが、I say not 型否定が衰えた 17 世紀後半以降は徐々に衰退していき、ついに 18 世紀中頃には be/have を除いてまれになったのである。

7.6. 「定形動詞節において do を伴わない否定形式の投影」説を支える他の現象

not 後置型単純現在分詞に典型的に現われる動詞にはさらに特徴がある。*nor/neither/never/hardly/yet/no sooner/none* で開始する文において、語順を整えるための do に強い抵抗を示し続けた動詞でもあるという点である。また、とりわけ have にあてはまることだが、倒置による条件節・付加疑問文・感嘆文・ほかの助動詞との等位・代用法において do に抵抗した点である。

7.6.1. 語順を整えるための do への抵抗

初期近代英語における主語と動詞の語順研究を行った Bækken (1998: 267-281) は、表 10 の数値を挙げながら、1700 年頃に、neither, nor 等の否定副詞が文頭に来ると高い確率で倒置語順を誘発し、助動詞が文を整える役割を果たすようになったことを明らかにしている。彼女の関心は副詞の種類と倒置の確率との相関であるため、反例がいくつか示してあるものの、特に言及はない。ところが、実はそれらの中に、筆者の視点から大変意義ある動詞を見出すことができる。表 10 の右端欄に示されているように、助動詞を用いない倒置の用例に使われる動詞のほとんどは、not 後置型単純現在分詞に典型的に現れる動詞であるという点である。

表 10 文頭の副詞と倒置語順の割合—Bækken (1998: 267-281)

	1480-1530	1580-1630	1680-1730	助動詞を用いない倒置の 用例に垣間見える動詞
neither	100	100	93.9	go have know use
nor	15.8	75	99.1	care do fear have make need
never	33.3	28.6	50	hap mean
nevertheless	0	0	0	
only	0	0	0	
...				
little	-	100	-	know
...				

筆者の調査資料でも、(37) に示されているように、have, know, need 等は助動詞の助けなく倒置されている。

(37) a. <have>

1653 D. Osborne, *Letters*, 114, I doe not think this is sence nor have I time to look it over. | 1673 R. Yard, in W. D. Christie, ed., *Letters Addressed . . . to Sir Joseph Williamson*, I 186 (nor have they) | 1674 T. Derham, *ibid.*, II 139 (nor have I) | 1697 J. Gale, in J. Lowther, *Letters*, 380 (nor have wee) | *ibid.*, 452 (nor ... had I) | 1698 J. Lowther, *Letters*, 531 (nor had he) | *ibid.*, 552 (nor had my Lord L[onsdale]) | 1698 J. Gale, in J. Lowther, *Letters*, 609 (nor have I) | 1687 B. St. Michel, in H. T. Heath, ed., *Letters of Samuel Pepys*, 207 (Nor have I) | 1700 S. Pepys, in J. R. Tanner, ed., *Private Correspondence*, I 285 (nor have I) | *ibid.*, 344 (Nor have I) | *ibid.*, II 3, (nor had I) | J. Houblon, *ibid.*, 14 (nor have I) | 1701 S. Pepys, *ibid.*, II 243 (Nor have either of you) | 1741 R. Hurd, *Early Letters*, 52 (nor have I) | 1746 C. Lennox, *Correspondence*, 227 (nor have I) | 1731 J. Wesley, *Letters*, I 110 (Nor ... have I) | 1736 *ibid.*, 201 (neither have they) | 1759 T. Gray, *Correspondence*, II 631 (nor have I) | 1764 *ibid.*, 838 (nor has he) | 1765 H. Walpole, *ibid.*, II 903 (nor have they) | 1769 T. Gray, *ibid.*, III 1056 (nor have I) | 1760 W. Shenstone, *Letters*, 391 (nor has it) | *ibid.*, 393 (nor have I) | 1762 *ibid.*, 442 (Neither have you) | 1792 J. Wedgwood, *Selected Letters*, 335 (Nor have they) | 1794 E. Darwin, *Letters*, 260, (nor have I) | 1795 R. Southey, *New Letters*, 90 (never had I) | 1797 *ibid.*, 144 (nor have I) | 1799 *ibid.*, 193 (nor have I) | 1801 *ibid.*, 247 (yet have we) | 1802 G. Rose, *Diaries and Correspondence*, I 515 (nor had he) | 1830 G. Crabbe, *Selected Letters and Journals*, 371 (nor ... have I) | 1858 A. Tennyson, *Letters*, 194 (None have I) | 1866 *ibid.*, 438, (nor has he) | 1868 S. Palmer, *Letters*, II 778 (nor have I) | 1844 E. FitzGerald, *Letters*, I 439 (*nor has he; nor has not the other*) | 1880 E. W. Hamilton, *Diary*, I 73 (Never had a Government) | *ibid.*, 103 (nor has he)

b. <know>

1692 S. Pepys, in J. R. Tanner, ed., *Private Correspondence*, I 52, Nor know I any reason to disagree | 1693 J. Gale, in J. Lowther, *Letters*, 76 (nor know wee) | 1696 W. Gilpin, *ibid.*, 333 (nor I know not) | 1697 J. Lowther, *Letters*, 449 (nor know I) | 1698 *ibid.*, 521 (neither knows he) | 1767 J. Penrose, *Letters*, 198 (Nor know we)

c. <need>

1690 J. Evelyn, in J. R. Tanner, ed., *Private Correspondence*, I 29, nor needs he my comfort or counsel;

d. <do>

1673 R. Whitley, in W. D. Christie, ed., *Letters Addressed . . . to Sir Joseph Williamson*, II 76, nor did we any thing . . . that you would have bin pleased with the account of;

e. <others>

1699 S. Pepys, in J. R. Tanner, ed., *Private Correspondence*, I 251, nor send I them now | 1700 J. Evelyn, *ibid.*, I 342, Vetruius has said nothing of repaires, nor hardly remember I of any who repented not of an expense commonly greater than new-building, | 1701 S. Pepys, *ibid.*, II 176, Nor fayles shee . . . in returning all your remembrances of them in your letters, | 1701 J. Jackson, *ibid.*, II 231, nor remains there any temptation here to interpose between them. | 1738 J. Wesley, *Letters*, I 239, neither regard I the contempt

したがって、表4でこれらの動詞が特化していることには尤もな理由があることになる。

7.6.2. 倒置による条件節・付加疑問文・感嘆文・ほかの助動詞との等位・代用法における do への抵抗

また、(38)-(42)に示されているように、not 後置型単純現在分詞に代表的な動

詞は、調査資料に関する限りとりわけ have に偏ってはいるが、倒置による条件節・付加疑問文・感嘆文・他の助動詞との等位・代用法の面で、他の一般の動詞とは異なる特別な振舞いをしている。

(38) 倒置条件節において do に抵抗を示した点

a. <have>

1698 J. Lowther, *Letters*, 532, The sill mentioned may probably be very proper for stoneware but cannot be truly judged off without tryal, which Mr Dwight would be glad to make had he any of it at Fullham. | 1698 J. Gale, *ibid.*, 569 (had I) | 1739 J. Wesley, *Letters*, 333 (had I) | 1760 W. Shenstone, *Letters*, 393 (had I) | *ibid.*, 396 (had I) | 1762 E. Gibbon, *Letters*, 128 (had we) | 1765 T. Gray, *Correspondence*, II 860 (had I) | 1807 R. Southey, *New Letters*, 441 (had you) | 1828 G. Crabbe, *Selected Letters and Journals*, 337 (had I) | 1842 T. Carlyle, in *Letters of Edward FitzGerald*, I 348 (had I) | 1864 A. Tennyson, *Letters*, 369 (had I) | 1869 *ibid.*, 536 (had I)

b. <come>

1878 G. Meredith, 290, Come you to London on your way to the Continent, you must give us a visit.

(39) 付加疑問文において do に抵抗を示した点

<have>

1833 E. FitzGerald, I 131, You have a good deal of leisure, have you not? | 1842 *ibid.*, 307, You have a bad habit of reading letters out, have you not? | 1872 F. Kilvert, II 210, I asked . . . ‘What do you do?’ ‘We go out hawking,’ said the girl in a low voice. ‘You have a beautiful voice.’ ‘Hasn’t she?’ interrupted the elder girl eagerly and delightedly. | 1879 G. Eliot, 509, I have plenty to think of, have I not?

(40) 感嘆文において do に抵抗を示した点

1807 D. Wordsworth, *Letters*, 86 (oh! How much more delight have I . . .!) | 1809

H. More, III 315 (what bright spots have we . . . !)

(41) 他の助動詞との等位において do に抵抗を示した点

1743 R. Hurd, 122, I have not, nor can immediately have that warm Affection for him, I once had. | 1751 P. D. Stanhope, 223, your dancing-master, who is at this time the most useful and necessary of all the masters you have or can have. (Cp. *ibid.*, 243, my attention can, and does, from its centre extend itself to every profit of the circumference.) | 1752 *ibid.*, 258, The Duke of Marlborough . . . had a manner, which he could not, and did not, resist.)

(42) 代用法の do に強い抵抗を示し続けた点

1693 H. Shere, in Pepys-3, I 66, the Great King of France has not more thoughtfulness about his success against so many confederate foes than I have how you may hold out against the stone and the scurvy.

7.7. 「定形動詞節において do を伴わない否定形式の投影」説の課題

このように、not 後置型単純現在分詞の最大の要因として、定形動詞節において do を伴わない否定形式の投影の可能性を力説してきたが、課題がないわけではない。do に特に根強く抵抗した動詞のうち、doubt の not 後置型単純現在分詞が 1 例も発見できなかった点である。

調査資料において do に根強く抵抗し続けた動詞は、表 11, 12 のとおりである。(表 11, 12 は暫定的なものである。調査テキストの中には世紀をまたがる日記・書簡集があり、主としてどちらの世紀に属するかで、用例数を一方に放り込んである。25 年ないしは 50 年単位の頻度表が完成するまでの暫定的なものであるが、表 12 の「用例総数」欄にみる限り、18 世紀を迎える前に do 形が do を用いない形を凌駕している点は疑う余地がない。) 最終的に、あくまで do を用いない形の占める比率の点においてであるが、do に抵抗した動詞として、be 動詞のほか、表 11 から have, 表 12 およびグラフ 4 から doubt, know, mistake, question, need, value, love を挙げることができる。

もしも「定形動詞節において do を伴わない否定形式の投影」説に妥当性がある

るなら、これらの動詞の not 後置型単純現在分詞が出現しても不思議はないはずなのだが、表4の動詞との照合からわかるように、doubt, mistake, question, value, love の後置型は1例も見つからなかった。ただ、mistake は前置型も1例もなく、value は1例、question と love は各2例あっただけなので、事実上、doubt の後置構造が1例もないことだけが課題として残る。(しかし、これは、OED² on CD-ROM の分析で補うことができる。中村 (2007 発行予定) で論じる予定であるが、さしあたっては中村 (2005: 第6節) を参照せよ。)

表11 have の、否定平叙文における単純形(s)と迂言形(do)の相剋—日記・書簡資料

	否定平叙文		
	s	do	% do
16c	1	0	-
17c	38	0	0
18c	899	5	0.6
19c	614 ₊₂	5	0.8
20c	20	23	53.5

表12 Ellegård (1953) が指摘した“know-group”の動詞及びその他の動詞の、否定平叙文における単純形と迂言形の相剋—日記・書簡資料

	<i>know</i>		<i>care</i>		<i>doubt</i>		<i>matter</i>		<i>mistake</i>	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	2	1	1	0	7	0	0	0	0	0
17c	762	182	33	19	234	60	10	0	6	4
18c	580	770 ₊₁	27	96	168	132	0	1	14	9
19c	369	936	33	131 ₊₂	76	39	9	35	14	2
20c	0	75	0	3	0	0	0	7	0	0

	<i>come</i>		<i>do</i>		<i>find</i>		<i>meet</i>		<i>need</i>	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
17c	110	68	45	37 ₊₂	36	78	16	14	10	3
18c	30	174 ₊₁	6	34 ₊₁	15	86	2	22	10	7
19c	6	141	0	60 ₊₁	3	60	2	23	7	6 ₊₁
20c	0	9	0	10	0	4	0	0	0	4

	<i>say</i>		<i>see</i>		<i>love</i>		<i>question</i>		<i>stay</i>	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17c	13	21 ₊₂	34	99 ₊₂	19	28	25	14	42	27
18c	18	69 ₊₁	23	228 ₊₁	5	53	33	20	1	116 ₊₁
19c	13	81	5	254 ₊₃	8	33	0	0	1	18
20c	0	7	0	28	4	2	0	0	0	1

	<i>value</i>		<i>ask</i>		<i>fear</i>		<i>deny</i>		<i>go</i>	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17c	18	8	2	8	10	15 ₊₁	1	9 ₊₂	54	52
18c	8	8	1	21	2	16	0	8	6	228
19c	0	3 ₊₁	2	26	3	9	0	6	1	163 ₊₂
20c	0	0	0	4	0	1	0	0	0	17

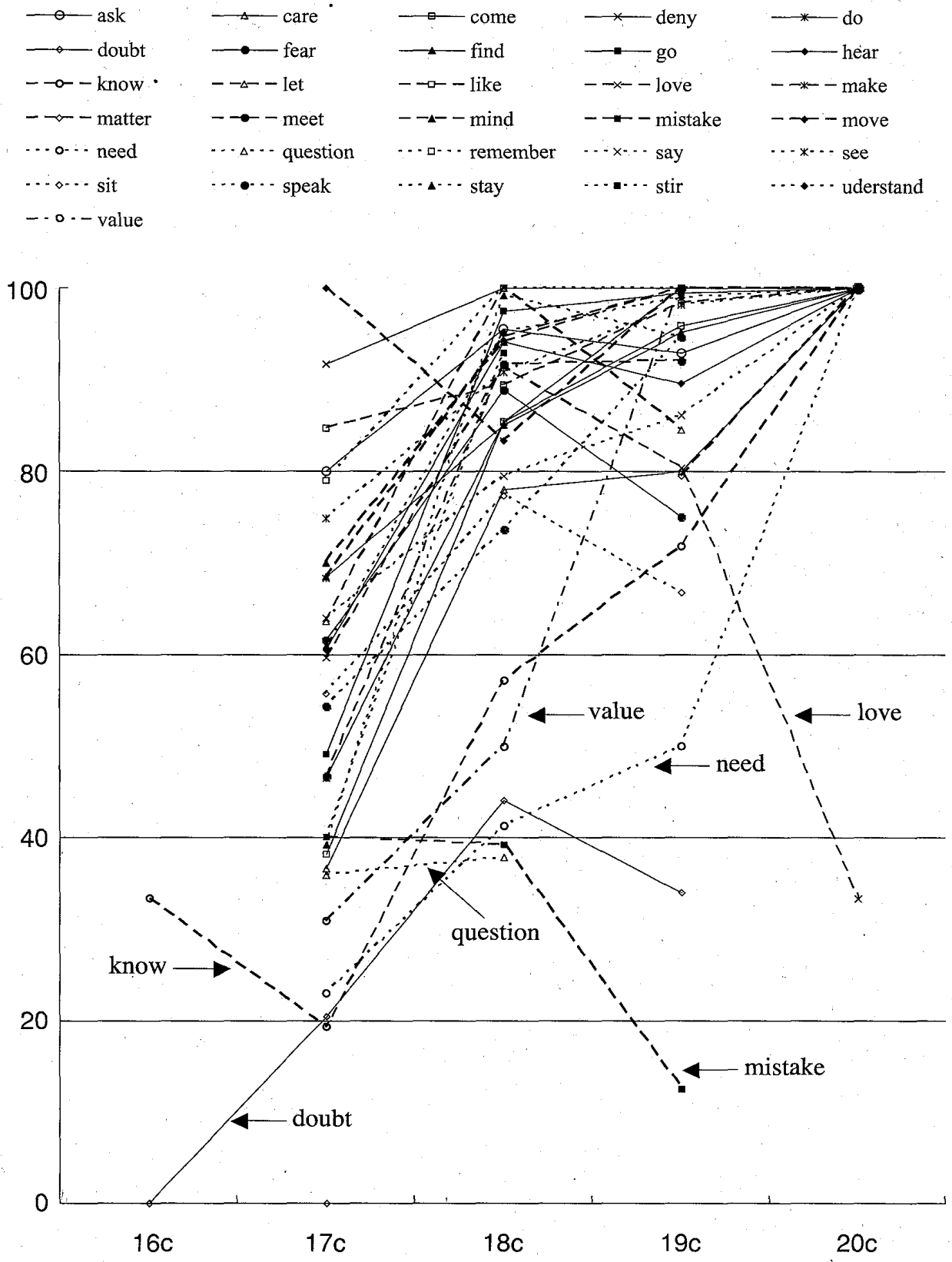
	<i>hear</i>		<i>let</i>		<i>like</i>		<i>make</i>		<i>mind</i>	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17c	32	47 ₊₂	4	7	17	94	13	27 ₊₁	6	13 ₊₁
18c	4	64	0	9 ₊₂	22	186	4	72	1	16
19c	5	42 ₊₁	2	11	7	387 ₊₁	0	66	0	50
20c	0	3	0	2	0	30	0	11	0	9

	<i>move</i>		<i>remember</i>		<i>sit</i>		<i>speak</i>		<i>stir</i>	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
17c	0	4	9	34	4	5	16	18 ₊₁	18	11 ₊₁
18c	1	5	0	72 ₊₁	5	17	10	28	1	13
19c	0	5	0	60 ₊₁	2	4	2	35	0	2
20c	0	1	0	9	0	0	0	2	0	0

	<i>understand</i>		用例総数	
	s	do	s	do
16c	0	0	19	12
17c	26	40	2150	2706 ₊₄₅
18c	5	98 ₊₁	1177	6642 ₊₆₂
19c	1	90 ₊₂	744	7460 ₊₅₁
20c	0	16	10	783 ₊₆

1,102 動詞 21,703₊₁₆₄ 例

グラフ4 “know-group” の動詞及びその他の動詞の、否定平叙文における迂言形の割合の推移—日記・書簡資料



8. 結論

not 後置型単純現在分詞の盛衰について、not 後置型単純動名詞や not 後置型複合分詞／動名詞の消長と絡めながら論じてきた。現在分詞の場合、単純形であれ複合形であれ、not 後置型が多数存在していた事実を突き止めた。先行研究の言説と異なる驚くべき事実であり、まずこの点でわれわれは史実の訂正を行わなければならない。

本論文では、特に not 後置型単純現在分詞に焦点を当てた。ある一群の動詞に典型的に出現する構造で、多くの人々によって、教養ある人々によってさえも使われていた語法であることが判明した。この構造の起源として、定形動詞節において do を伴わない否定形式が投影されたものであると提案した。結局、not 後置型単純現在分詞の消滅は、*I know not the news* 型否定平叙文の衰退、それは同時に助動詞 do の定着、を知らせるサインにはほかならなかった。事実、17世紀後半の do を伴わない否定形式の衰退から遅れること 1 世紀、後置構造はほぼ消滅した。not 後置型単純現在分詞の歴史は、助動詞 do の発達の隠れた側面を物語る貴重な証人である。

近代英語前期に、定形節における文否定は、be/have を除き do を用いる否定へと変わった。局所否定でない not の最後の砦だった現在分詞 Verb-ing not が衰滅する運命を辿った理由として、元となる do-less form が衰退し not 後置型現在分詞はそれに追随したという点、not は否定される語の直前に位置するようになったという定向変化、異形は相互に何らかの役割分担があればこそ共存するのが常だが、前置型と後置型の間には何ら役割分担がなかった、ないしは希薄だったため、両者は相補分布を成していなかった点を指摘することができる。

注

* 本稿は、近代英語協会第 22 回大会（2005 年 5 月 20 日、於千葉大学）における個人研究発表「Not 後置型現在分詞の盛衰—助動詞 do の発達の更なる検証」全 7 節の 1-4 節を加筆修正したものである。5 節に示した電子コーパス ICAME からの調査結果と 6 節に示した OED² on CD-ROM からのそれは、稿を改めて執筆したい。この論文を、英語史研究の楽しさを知り初めながら志半ばで急逝されたゼミ生千絵さんに捧ぐ。

1. (3c) に関しては、not 後置型の用例に含めるべきではないという異論が予想される。このようなタイプの用例に対する筆者の基準は、5.1. 節の最後の項目 (p.48 の表 2 とその前の本文) をお読みいただきたい。
2. BROWN コーパスには、I say not タイプや I not say タイプさえも使われている。書き手や書き物の性質についてまだ綿密な吟味は行っていないが、旧型の否定平叙文が 1961 年当時のアメリカ英語に残存していたことだけは確かである。
3. P. Laurie の日記は 1823 年頃までの 22 ページ分は回想形式がとられており、45 才となった頃に日記をつけ始めたものと考えられる。また、日付と日記文が 1 対 1 で対応する日記形式がとられるようになるには、1830 年まで待たなければならない。筆者は、煩雑さを避けるため、用例の日付はテキストの西暦どおりに処理した。同様に、Evelyn の日記も、開始年の西暦と実際につけ始めた年との間に 20 年近い開きがある。
4. Nakamura (1998, 2000) とは異なり、非母語話者が書いた日記や手紙は、いかに英語が堪能な人であろうと、用例から除いた。次の一覧の J. R. Forster は、Captain J. Cook の 2 度目の航海に同行した筆頭博物学者として有名なドイツ人、J. Stinstra は、S. Richardson の *Clarissa* や *Sir Charles Grandison* を蘭訳したことで知られるオランダ人聖職者である。彼らの航海誌や手紙に not 後置型現在分詞も使われていたが、除外した。括弧内の数値は頻度をあらわす。

	前置	後置
分詞 V-ing	J. R. Forster (mention, find, attend, reach, think, allow, understand (各1); exceed, know, have (各2); be (6)) J. Stinstra (abstain, find, permit (各1))	J. R. Forster (be 1, have 2)
分詞 being PP	J. R. Forster (1)	J. R. Forster (1)
分詞 having PP	J. R. Forster (2)	J. R. Forster (1)
動名詞 V-ing	J. R. Forster (see (1), be (2), permit (2))	

5. not が to- 不定詞のほうと緊密である点は、(i) のように、to- 不定詞を従えている動詞と今日では強調機能しか残っていない肯定平叙文の do とが共起している構造や、(ii) のように to- 不定詞を従えている動詞部分が受身形になっている構造から窺い知ることができる。特に (ii) の例文では、not はそれぞれ異なる要素を修飾していて興味深い。最初の not は being taught を否定しているのに対し、問題の not は to see を否定している。
 - (i) 1664 S. Pepys, *Diary*, V 224, I did desire not to have it at all | 1667 S. Pepys, *Diary*, VIII 110, our maisters do begin not to like of their counsels in fitting out no fleet, but only squadrons
 - (ii) 1749 G. B. Dodington, 18, the bulk of mankind, I say, not being taught to see, or rather being taught not to see it in that light, judged of it in gross,
6. 日記や書簡を調査資料とする楽しみの一つは、その時代の英語に対する書き手の生の証言が得られることがある点にある。本論文で扱われている語法に関しては、Defoe の次の記述が興味深い。

1710 D. Defoe, *Letters*, 287, I do Not pretend to be Able to Merit So Much Favor; yet the Meanest Capacity can allways do Something. There is a Difference between Not being Worthy, and being Unworthy. I hope I Need Not assure you Sir That I will slip no Opportunity of Service, but Sir It is wholly in your Self to make me Usefull, and as the Favor comes by your Intercession, So the Power of Serving Depends Upon your Assistance in Directing.

Defoeは決して当時の not と -ing の相対的位置自体について考えを述べているわけではないが、下線部の箇所、*not being* (Adjective) と *being un* (Adjective) との間には違いがあることを示唆している。後者のほうがストレートな言い回しであろうが、not 後置型 *being not* (Adjective) は両者とどのような違いがあったのであろうか。残念ながら、この疑問に対する答えのヒントとなる記述は、調査資料からは一切得られなかった。

7. Nakamura (1998, 2000) には、90 種（総 124 冊）のテキスト別に前置型と後置型の使用頻度が示されている。
8. 言語内的要因の 1 つとして、音韻的要因も検討の余地がある。たとえば、例文 (18b), (19b), (21b), (23b) においては、強勢の置かれぬ代名詞が分詞の独立主語になり、きれいな 2 重の弱強節 (~~~~) を作り上げている。これだけを見れば、not 後置型構造に音韻的要因の可能性もありそうに思われる。しかしながら、代名詞が分詞の独立主語になっても前置型のほうが多いため、リズムに起因させた音韻的要因は捨てざるを得ない。
9. 参考までに、否定副詞 *never* も、現代英語に比べて位置が自由で、助動詞の直後に置く必要はなかった。*never Aux have PP*, *never be/have PP*, *never Aux V*, *have PP never* の語順が、Mrs. Arbuthnot, P. Hawker, E. Buxton, J. Gay, D. Eaton, C. Lennox (= 2nd Duke of Richmond), J. Wedgwood, W. Blake, R. Southey, T. Raikes, R. Peel, E. FitzGerald, A. Tennyson, A. C. Swinburne によって使われている。
10. 20 世紀末のイギリス英語にさえ not 後置型構造が残存しているとして、(3d) に単純動名詞 *caring not* の用例を示したが、このような「定形動詞節において do を伴わない否定形式の投影」説に立つと説明がつく。care は、長らく do に抵抗し続けた代表的動詞の 1 つだからである。(3d) の *caring not* は、いわば 20 世紀末に残る「化石」である。

参照文献

- Bækken, Bjørg (1998) *Word Order Patterns in Early Modern English, with Special Reference to the Position of the Subject and the Finite Verb*, Novus Press, Oslo.
- Bullokar, William (1586) "Booke at Large Bref Grammar and Pamphlet for Grammar," with Explanatory Remarks by Takanobu Otsuka, in Takanobu Otsuka, gen. ed. (1971) *A Reprint Series of Books Relating to the English Language*, Vol. 1, Nan'un-do, Tokyo, 5-164.
- Curme, George O. (1931) *Syntax* (Maruzen Asian Edition), D. C. Heath, Boston/ Maruzen, Tokyo,
- Ellegård, Alvar (1953) *The Auxiliary Do: The Establishment and Regulation of Its Use in English*,

Almqvist & Wiksell, Stockholm.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Fujio, Nakamura (1998) "The extinction of participial *being/having/knowning not*: further evidence confirming the regulation of the negative declarative sentence with auxiliary *do*", in M. Kanno et al., ed., *A Love of Words: English Philological Studies in Honour of Akira Wada*, Eihōsha, Tokyo, 245-266.

Nakamura, Fujio (2000) "The rise and fall of the construction of *being/having/knowning not*, in connection with the establishment of the negative declarative sentence with the auxiliary *do*," Paper presented at the 11th International Conference on English Historical Linguistics, University of Santiago de Compostela, Spain.

中村不二夫 (2005) 「Not 後置型現在分詞の盛衰—助動詞 *do* の発達の更なる検証」近代英語協会第 22 回大会 (於千葉大学)。

中村不二夫 (2007 発行予定) 「Not 後置型-ing 形の盛衰—助動詞 *do* の発達の隠れた側面 (2) OED² on CD-ROM を根拠に」『愛知県立大学文学部論集(英文学科編)』第56号。

Priestley, Joseph (1761 [1769]) "The Rudiments of English Grammar, Adapted to the Use of Schools; with Notes and Observations, for the Use of Those Who Have Made Some Proficiency in the Language," with Explanatory Remarks by Kikuo Yamakawa, in Takanobu Otsuka, gen. ed. (1971) *A Reprint Series of Books Relating to the English Language*, Vol. 14, Nan'un-do, Tokyo, 9-137.

Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Söderlind, Johannes (1958) *Verb Syntax in John Dryden's Prose*, Pt. II, rpt., Kraus Reprint, Nendeln, 1976.

Wada, Akira (1975) "Word-order of the Negative Not in Thomas Deloney's English," *Eigo to Eibei-Bungaku* [English and English-American Literature] 9, 15-33.

調査資料

《A》Diary 【Diarist (Lifetime)】 Editor. *Title*. Etc. 《Period covered》

D-1. 【Dee, J. (1527-1608)】 Halliwell, J. O., ed. *The Private Diary of Dr. John Dee*. Camden, 1842. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1968. 《1577-1601》

2. 【Hoby, M. (1571-1633)】 Meads, D. M., ed. *Diary of Lady Margaret Hoby, 1599-1605*. London: George Routledge & Sons, 1930. 《1599-1605》

3. 【Glanville, J. (1586-1661)】 Grosart, A. B., ed. *The Voyage to Cadiz in 1625 Being a Journal Written by John Glanville*. Camden, 1883. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1965. 《1625》

4. 【Rous, J. (1584-1644)】 Green, M. A. E., ed. *Diary of John Rous*. Camden, 1856. Rpt., New York:

- Johnson Reprint, 1968. 《1625-1642》
5. 【Roe, secretary of J. Birch (1616-1691)】 Webb, T. W., ed. *Military Memoir of Colonel John Birch*. Camden, 1873. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1965. 《1642-1645》
 6. 【Milward, J. (1599-1670)】 Robbins, C., ed. *The Diary of John Milward*. London: Cambridge University Press, 1938. 《1666-1668》
 7. 【Symonds, R. (1617-?1692)】 Long, C. E., ed. *Diary of the Marches of the Royal Army during the Great Civil War; Kept by Richard Symonds*. Camden, 1859. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1968. 《1644-1645》
 8. 【Josselin, R. (1617-1683)】 Macfarlane, A., ed. *The Diary of Ralph Josselin 1616-1683*. London: Oxford University Press, 1976. 《?1643-1683》
 9. 【Evelyn, J. (1620-1706)】 de Beer, E. S., ed. *The Diary of John Evelyn*. 6 Vols. Oxford: Clarendon Press, 1955. 《1640-1706》
 10. 【Pepys, S. (1633-1703) - a】 Latham, R. and W. Matthews, eds. *The Diary of Samuel Pepys*. 11 Vols. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1970-83. 《1660-1669》
 11. 【Pepys, S. (1633-1703) - b】 Howarth, R. G., ed. *Letters and the Second Diary of Samuel Pepys*. London: J. M. Dent, 1932. Diary 《1683-1684》
 12. 【Cartwright, Th. (1634-1689)】 Hunter, J., ed. *The Diary of Dr. Thomas Cartwright*. Camden, 1843. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1968. 《1686-1687》
 13. 【Davies, R. (1649-1721)】 Caulfield, R., ed. *Journal of the Very Rev. Rowland Davies*. Camden, 1857. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1968. 《1689- 1690》
 14. 【Halley, Edmond (1656-1742)】 Thrower, N. J. W., ed. *The Three Voyages of Edmond Halley in the Paramore 1698-1701*. London: The Hakluyt Society, 1981. 《1689-1690》
 15. 【Nicolson, W. (1655-1727)】 Jones, C., and G. Holmes, eds. *The London Diaries of William Nicolson, Bishop of Carlisle, 1702-1718*. Oxford: Clarendon Press, 1985. 《1702-1718》
 16. 【Dodington, G. B. (1691-1762)】 Carswell, J. and L. A. Dralle, eds. *The Political Journal of George Bubb Dodington*. Oxford: Clarendon Press, 1965. 《1749-1762》
 17. 【Wesley, J. (1703-1791)】 Parker, P. L., abridg., Hughes, H. P., intro., Birrell, A., apprec. *John Wesley's Journal*. London: Isbister, 1902. 《1735-1790》
 18. 【White, G. (1720-1793)】 Greenoak, F., ed. *The Journals of Gilbert White*. Vol. 2: 1774-1783. Mabe, R., gen. ed. London: Century, 1988. 《1774-1783》
 19. 【Staniforth, T. (1735-1803)】 Hext, J., ed., Rowse, A. L., foreword. *The Staniforth Diary: A Visit to Cornwall in 1800*. Truro: D. Bradford Barton, 1965. 《1800》
 20. 【Hughes, A. (? -?)】 Croucher, M., foreword. *The Diary of a Farmer's Wife, 1796-1797*. 1937. Rpt., London: Allen Lane, 1980. 《1796-97》
 21. 【Woodforde, J. (1740-1803)】 Beresford, J., ed. *The Diary of a Country Parson: The Reverend*

- James Woodforde*. 5 Vols. 1924. Rpt., Oxford: Oxford University Press, 1981. 《1758-1802》
22. 【Stevens, W. B. (1756-1800)】 Galbraith, G., ed. *The Journal of the Rev. William Bagshaw Stevens*. Oxford: Clarendon Press, 1965. 《1792-1800》
23. 【Sheridan, B. (1758-1837)】 LeFanu, W., ed. *Betsy Sheridan's Journal: Letters from Sheridan's Sister, 1784-1786 and 1788-1790*. London: Eyre & Spottiswoode, 1960. 《1784-90》
24. 【Wordsworth, D. (1771-1855)】 Moorman, M., ed., Darbishire, H., intro. *Journals of Dorothy Wordsworth*. The Alfoxden Journal 1798, The Grasmere Journals 1800-1803. 1958. 2nd ed. Rpt., Oxford: Oxford University Press, 1991. 《1798-1803》
25. 【Skinner, J. (1772-1839)】 Coombs, H. and P., eds. *Journal of a Somerset Rector, 1803-1834, John Skinner, A. M. Antiquary, 1772-1839, Parochial Affairs of the Parish of Camerton*. 1930. Revised and Enlarged ed. Weston-super-Mare: Kingsmead, 1971. 《1803-1834》
26. 【Campbell, C. S. M. (1775-1861)】 Steuart, A. F., ed. *The Diary of a Lady-in-Waiting*. Vol. I. London: John Lane, The Bodley Head, 1908. 《1810-1815》
27. 【Arbuthnot, H. (?1793-1834)】 Bamford, F. and the Duke of Wellington, eds. *The Journal of Mrs. Arbuthnot, 1820-1832*. Vol. I: February 1820 to December 1825. London: Macmillan, 1950. 《1820-1825》
28. 【Laurie, P. (1778-1861)】 Shepherd, E., ed. *The Journal of Sir Peter Laurie*. Tunbridge Wells: Costello, with the Saddlers' Company, 1985. 《?1823-1859》
29. 【Hawker, P. (1786-1853)】 Payne-Gallwey, R., intro, McKelvie, C. L., new foreword. *The Diary of Colonel Peter Hawker, 1802-1853*. 2 Vols. 1893. Rpt., London: Greenhill Books, 1988. 《1802-1853》
30. 【Watkin, A. (1787-1861)】 Watkin, A. E., ed. *Absalom Watkin: Extracts from His Journal 1814-1856*. London: T. Fisher Unwin, 1920. 《1814-1856》
31. 【Todd, M. (1791-1853)】 Trease, G., ed. *Matthew Todd's Journal: A Gentleman's Gentleman in Europe 1814-1820*. London: Heinemann, 1968. 《1814-1820》
32. 【Greville, H. W. (1801-1872)】 *Leaves from the Diary of Henry Greville*. Vols I & II, ed. by Viscountess Enfield. Vols III & IV, ed. by Countess of Strafford. London: Smith, Elder, & Co., 1883-1905. 《1832-1872》
33. 【Gladstone, W. E. (1809-1898)】 Foot, M. R. D., ed. *The Gladstone Diaries*. Vol. I: 1825-1832. Oxford: Clarendon Press, 1968. 《1825-1832》
34. 【Darwin, C. (1809-1882)】 Keynes, R. D., ed. *Charles Darwin's Beagle Diary*. Cambridge: Cambridge University Press, 1988. 《1831-1836》
35. 【Huxley, T. H. (1825-1891)】 Huxley, J., ed. *T. H. Huxley's Diary of the Voyage of H. M. S. Rattlesnake*. London: Chatto and Windus, 1935. 《1846-1850》
36. 【Kilvert, F. (1840-1879)】 Plomer, W., ed. *Kilvert's Diary: Selections from the Diary of the Rev.*

Francis Kilvert. 3 Vols. 1938-40. Rpt., London: Jonathan Cape, 1980. 《1870-1879》

37. 【Hawker, J. (1836-1921)】 Christian, G., ed. *James Hawker's Journal: A Victorian Poacher*. London: Oxford University Press, 1961. 《1904-1905》
38. 【Buxton, E. (1848-1892)】 Creighton, E. R. C., arrang. *Ellen Buxton's Journal, 1860-1864*. London: Geoffrey Bles, 1967. 《1860-1864》
39. 【Hamilton, E. W. (1847-1908)】 Bahlman, D. W. R., ed. *The Diary of Sir Edward Walter Hamilton, 1880-1885*. Vol. I: 1880-1882. Oxford: Clarendon Press, 1972. 《1880-1882》
40. 【Macmillan, M. H. (1894-1986)】 *War Diaries: Politics and War in the Mediterranean, January 1943-May 1945*. London: Macmillan, 1984. 《1943-1945》
41. 【Spender, S. H. (1909-1995)】 Goldsmith, J., ed. *Stephen Spender: Journals 1939-1983*. Corrected paperback edition. London: faber and faber, 1992. 《1939-1983》

《B》 Correspondence 【Main provenance/correspondent (Lifetime)】 Editor. *Title*. Etc.
《Period covered》

- L-1. 【Lit. Men-1】 Ellis, H., ed. *Original Letters of Eminent Literary Men of the Sixteenth, Seventeenth, and Eighteenth Centuries*. Camden, 1843. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1968. Lett. nos. 1-26. 《15.-1596》
2. 【King Charles I (1600-1649)】 Bruce, J., ed. *Charles I. in 1646: Letters of King Charles the First to Queen Henrietta Maria*. Camden, 1856. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1968. 《1646-1647》
3. 【Family of Hatton】 Thompson, E. M., ed. *Correspondence of the Family of Hatton, Being Chiefly Letters Addressed to Christopher First Viscount Hatton, A.D. 1601-1704*. Vol. 1. Camden, 1878. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1965. 《1601-1680》
4. 【Osborne, D. (1627-1695)】 Smith, G. C. M., ed. *The Letters of Dorothy Osborne to William Temple*. Clarendon, 1928. Rpt., Oxford: Oxford University Press, 1968. 《1652-1657》
5. 【Pepys, S. (1633-1703) - 1】 Howarth, R. G., ed. *Letters and the Second Diary of Samuel Pepys*. London: J. M. Dent, 1932. 《Lett., 1655-1703》
6. 【Pepys, S. (1633-1703) - 2】 Heath, H. T., ed. *The Letters of Samuel Pepys and His Family Circle*. Oxford: Clarendon, 1955. 《1663-1692》
7. 【Pepys, S. (1633-1703) - 3】 Tanner, J. R., ed. *Private Correspondence and Miscellaneous Papers of Samuel Pepys, 1679-1703*. 2 Vols. London: G. Bell & Sons, 1926. 《1679-1703》
8. 【Williamson, J.】 Christie, W. D., ed. *Letters Addressed from London to Sir Joseph Williamson*. 2 Vols. Camden, 1874. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1965. 《1673-1674》
9. 【Lit. Men-2】 Ellis, H., ed. *Original Letters of Eminent Literary Men of the Sixteenth, Seventeenth, and Eighteenth Centuries*. Camden, 1843. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1968.

Let. nos. 27-123. 《1605-1699》

10. 【Etherege, Sir G. (?1635-1691)】 Bracher, F., ed. *Letters of Sir George Etherege*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1974. 《1670-1689》
11. 【Russel, R. (1636-1723)】 Sellwood, T., ed. *Letters of Lady Rachel Russell, From the Manuscript in the Library at Woburn Abbey, To Which Is Prefixed An Introduction Vindiciating the Character of Lord. Russell against Sir John Dalrymple, &c.* 1748. 2nd ed. London: Edward and Charles Dilly, 1773. 《1679-1718》
12. 【Savile, H. (1642-1687)】 Cooper, W. D., ed. *Savile Correspondence: Letters to and from Henry Savile*. Camden, 1858. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1968. 《1661-1689》
13. 【Lowther, J. (1642-1706)】 Hainsworth, D. R., ed. *The Correspondence of Sir John Lowther of Whitehaven, 1693-1698: A Provincial Community in Wartime*. London: Oxford University Press, 1983. 《1693-1698》
14. 【Newton, Sir I. (1642-1727)】 Hall, A. R., and L. Tilling, eds. *The Correspondence of Isaac Newton*. Vol. 5: 1709-1713. Cambridge: Cambridge University Press, 1975. 《1709-1713》
15. 【Defoe, D. (?1659/?61-1731)】 Healey, G. H., ed. *The Letters of Daniel Defoe*. Oxford: Clarendon Press, 1955. 《1703-1730》
16. 【Steele, R. (1672-1729)】 Blanchard, R., ed. *The Correspondence of Richard Steele*. Oxford: Oxford University Press, 1941. 《?1684-1725》
17. 【Swift, J. (1667-1745)】 Williams, H., ed. *Jonathan Swift: Journal to Stella*. 2 Vols. Oxford: Clarendon Press, 1948. 《1710-1713》
18. 【Addison, J. (1672-1719)】 Graham, W., ed. *The Letters of Joseph Addison*. Oxford: Clarendon Press, 1941. 《1695-1719》
19. 【Gay, J. (1685-1732)】 Melville, L. *Life and Letters of John Gay (1685-1732): Author of "The Beggar's Opera"*. London: Daniel O'Connor, 1921. 《1714-1732》
20. 【Richardson, S. (1689-1761)】 Slattery, W. C., ed. *The Richardson-Stinstra Correspondence and Stinstra's Prefaces to Clarissa*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1969. 《1752-1756》
21. 【Eaton, D. (1698-1742)】 Wake, J. and D. C. Webster, eds. *The Letters of Daniel Eaton to the Third Earl of Cardigan, 1725-1732*. Kettering: Dalkeith Press, 1971. 《1725-1732》
22. 【Stanhope, P. D., Fourth Earl of Chesterfield (1694-1773)】 Roberts, D., ed. *Lord Chesterfield: Letters*. Oxford: Oxford University Press, 1992. 《1728-1772》
23. 【Lennox, C., 2nd Duke of Richmond (1701-1750)】 McCann, T. J., ed. *The Correspondence of the Dukes of Richmond and Newcastle, 1724-1750*. Lewes: Sussex Record Society, 1984. 《1724-1750》
24. 【Wesley, J. (1703-1791)】 Telford, J., ed. *The Letters of the Rev. John Wesley, A. M., Sometime Fel-*

- low of Lincoln College, Oxford*. Vol. I: November 3, 1721, to November 14, 1741. 1931. Rpt., London: The Epworth Press, 1960. 《1721-1741》
25. 【Dodsley, R. (1703-1764)】 Tierney, J. E., ed. *The Correspondence of Robert Dodsley, 1733-1764*. Cambridge: Cambridge University Press, 1988. 《1733-1764》
26. 【Penrose, J. (1713-1776)】 Mitchell, B. and H. Penrose, eds. *Letters from Bath, 1766-1767, by the Rev. John Penrose*. Gloucester: Alan Sutton, 1983. 《1766-1767》
27. 【Gray, T. (1716-1771)】 Toynbee, P., and L. Whibley, eds., Starr, H. W., correct. *Correspondence of Thomas Gray*. 3 Vols. Clarendon, 1935. Rpt., Oxford: Oxford University Press, 1971. 《1734-1771》
28. 【Shenstone, W. (1714-1763)】 Mallam, D., ed. *Letters of William Shenstone*. Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1939. 《1736-1763》
29. 【Pierce, E. (?-1776)】 Macdonald, V. M., ed. *The Letters of Eliza Pierce, 1751-1775, with Letters from Her Son Pierce Joseph Taylor, a Schoolboy at ETON*. London: Frederick Etchells & Hugh Macdonald, 1927. 《1751-1771》
30. 【Hurd, R. (1720-1808)】 Brewer, S., ed. *The Early Letters of Bishop Richard Hurd, 1739-1762*. Woodbridge: Boydell Press, 1995. 《1739-1762》
31. 【Smith, A. (1723-1790)】 Mossner, E. C. and I. S. Ross, eds. *The Correspondence of Adam Smith*. Oxford: Clarendon Press, 1977. 《1740-1790》
32. 【Percy, T. (1729-1811)】 Brooks, C., ed. *The Correspondence of Thomas Percy & William Shenstone*. New Haven & London: Yale University Press, 1977. 《1757-1763》
33. 【Wedgwood, J. (1730-1795)】 Finer, A. and G. Savage, eds. *The Selected Letters of Josiah Wedgwood*. London: Cory, Adams & Mackay, 1965. 《1762-1795》
34. 【Darwin, E. (1731-1802)】 King-Hele, D., ed. *The Letters of Erasmus Darwin*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981. 《1749-1802》
35. 【Gibbon, E. (1737-1794)】 Norton, J. E., ed. *The Letters of Edward Gibbon*. Vol. 1: 1750-1773. London: Cassell and Company, 1956. 《1750-1773》
36. 【Lit. Men-3】 Ellis, H., ed. *Original Letters of Eminent Literary Men of the Sixteenth, Seventeenth, and Eighteenth Centuries*. Camden, 1843. Rpt., New York: Johnson Reprint, 1968. Lett. nos. 124-192. 《1700-1799》
37. 【Rose, G. (1744-1818)】 Harcourt, L. V., ed. *The Diaries and Correspondence of the Right Hon. George Rose: Containing Original Letters of the Most Distinguished Statesmen of His Day*. Vol. I. London: Richard Bentley, 1860. 《1782-1802》
38. 【More, H. (1745-1833)】 Roberts, W., ed. *Memoirs of the Life and Correspondence of Mrs. Hannah More*. Vols. III and IV. 2nd ed. London: R. B. Seeley and W. Burnside, 1834. 《1785-1828》

39. 【Burns, R. (1759-1796)】 Johnson, R. B., ed. *The Letters of Robert Burns*. London: John Lane the Bodley Head, 1928. 《1781-1796》
40. 【Crabbe, G. (1751-1832)】 Faulkner, T. C., ed. *Selected Letters and Journals of George Crabbe*. Oxford: Clarendon Press, 1985. 《1781-1832》
41. 【Blake, W. (1757-1827)】 Keynes, G., ed. *The Letters of William Blake, with Related Documents*. 1956. 3rd ed. Oxford: Clarendon Press, 1980. 《1795-1829》
42. 【Cobbett, W. (1762-1835)】 Cole, G. D. H., ed. *Letters from William Cobbett to Edward Thornton, Written in the Years 1797 to 1800*. London: Oxford University Press, 1937. 《1797-1800》
43. 【Rogers, S. (1763-1855)】 Barbier, C. P., ed. *Samuel Rogers and William Gilpin: Their Friendship and Correspondence*. London: Oxford University Press, 1959. 《1796-1803》
44. 【Southey, R. (1774-1843)】 Curry, K., ed. *New Letters of Robert Southey*. Vol. 1: 1792-1810. London: Columbia University Press, 1965. 《1792-1810》
45. 【Wordsworth, D. (1771-1855)】 Hill, A. G., ed. *Letters of Dorothy Wordsworth*. 1981. Rpt., Oxford: Clarendon Press, 1985. 《1787-1838》
46. 【Raikes, T. (1778-1848)】 Raikes, H., ed. *Private Correspondence of Thomas Raikes, with the Duke of Wellington and Other Distinguished Contemporaries*. London: Richard Bentley, 1861. 《1812-1847》
47. 【Peel, R. (1788-1850)】 Peel, G., ed. *The Private Letters of Sir Robert Peel*. London: John Murray, 1920. 《1810-1846》
48. 【Clare, J. (1793-1864)】 Tibble, J. W. and A., eds. *The Letters of John Clare*. London: Routledge & Kegan Paul, 1951. 《1817-60》
49. 【Martineau, H. (1802-1876)】 Sanders, V., ed. *Harriet Martineau: Selected Letters*. Oxford: Clarendon Press, 1990. 《1819-1874》
50. 【Palmer, S. (1805-1881)】 Lister, R., ed. *The Letters of Samuel Palmer*. 2 Vols. Oxford: Clarendon Press, 1974. 《1814-1881》
51. 【FitzGerald, E. (1809-1883)】 Terhune, A. M. and A. B. Terhune, eds. *The Letters of Edward FitzGerald*. Vol. 1: 1830-50. Princeton: Princeton University Press, 1980. 《1830-1850》
52. 【Tennyson, A. (1809-1892)】 Lang, C. Y. and E. F. Shannon, Jr., eds. *The Letters of Alfred Lord Tennyson*. Vol. 2: 1851-1870. Oxford: Clarendon Press, 1987. 《1851-1870》
53. 【Ruskin, J. (1819-1900)】 Burd, van A., ed. *The Ruskin Family Letters: The Correspondence of John James Ruskin, His Wife, and Their Son, John, 1801-1843*. Vol. 1: 1801-1837. London: Cornell University Press, 1973. 《1801-1837》
54. 【Eliot, G. (1819-1880)】 Haight, G. S., ed. *Selections from George Eliot's Letters*. New Haven/London: Yale University Press, 1985. 《1836-1880》
55. 【Arnold, M. (1822-1888)】 Russell G. W. E., collect. and arrang. *Letters of Matthew Arnold: 1848-*

1888. Vol 1. London: Macmillan, 1895. 《1848-1868》

56. 【Meredith, G. (1828-1909)】 Meredith, M. M., ed. *Letters of George Meredith*. Vol. 1: 1844-1881. 2nd ed. London: Constable, 1912. 《1844-1881》

57. 【Dodgson, C. L. (1832-1898)】 Cohen, M. N., ed. *The Letters of Lewis Carroll*. Vol. 1. New York: Oxford University Press, 1979. 《ca. 1837-1885》

58. 【Swinburne, A. C. (1837-1909)】 Gosse, E. and T. J. Wise, eds. *The Letters of Algernon Charles Swinburne*. Vol. 1. London: William Heinemann, 1918. 《1858-1877》

59. 【Ritchie, A. T. (1837-1919)】 Ritchie, H., ed. *Letters of Anne Thackeray Ritchie, With Forty-two Additional Letters from her Father William Makepeace Thackeray*. Toronto: The Ryerson Press, 1924. 《1837-1919》

60. 【Wilde, O. O. W. (?1854/?56-1900)】 Hart-Davis, R., ed. *More Letters of Oscar Wilde*. 1985. Rpt., Oxford: Oxford University Press, 1988. 《?1876-1900》